

大学におけるスポーツ分野の多職種連携教育（IPE-S）プログラムの実践：

スポーツ・医療科学系学生におけるスポーツ関連多職種理解とキャリア形成意識への影響の評価

多田敬典^{1,2}, 吉田哲朗², 烏山 司², 寺本明日香¹,
近藤妃畝¹, 久保賢志³

¹至学館大学健康科学部, ²一般社団法人ドーピングO会,

³日本大学スポーツ科学部

要 旨

スポーツを取り巻く専門職の多様化が進む現代において、スポーツ分野でのキャリアを志す学生にとって、各専門職の役割理解や多職種連携の重要性を学ぶ機会は依然として限られている。本研究では、大学においてスポーツ分野を対象とした多職種連携教育（Interprofessional Education in Sports：IPE-S）プログラムを実施し、その教育的有効性を検証した。スポーツ・医療科学系の学部生および大学院生を対象に、多様な専門家による講義とグループワークを実施した。受講者59名および非受講者61名に対して、IPE-Sプログラムの前後にアンケート調査を行い、意識の変化は6段階リッカート尺度を用いて評価し、自由記述はテキストマイニングにより分析した。その結果、受講者は現場を支える多様な職種への理解を深め、多職種連携に対する意識の変化が示唆された。また、プログラム後の記述では「自分」という語の出現頻度が増加し、キャリア形成への内省が促された可能性があると考えられる。本研究は、IPE-Sがスポーツ分野におけるキャリア教育において有効である可能性が示唆された。一方で、実践的な連携体験の不足やグループワークの時間配分には課題が見られた。今後は、より実践的かつ継続的な教育プログラムの開発と、学生のキャリア形成に対する長期的な効果の検証が求められる。

キーワード

多職種連携教育（IPE）、スポーツ関連職種、キャリア教育

責任著者：多田敬典 Email: tada@sgk.ac.jp

緒 言

スポーツに関わる職種は年々多様化しており、従来のプロスポーツ選手やコーチに加え、スポーツ医療、スポーツ科学、スポーツビジネス、教育、行政など多岐にわたる領域が関与している。近年、スポーツ産業の拡張や大学におけるスポーツ関連学部の拡充が進んでおり、学生がスポーツ分野でのキャリアを目指す機会は増加している（スポーツ庁、2022）。しかし、このような環境整備にもかかわらず、スポーツ分野でのキャリア形成を志す学生の多くが、希望するスポーツ関連職種の就職先や将来の活動環境、雇用環境に対して不安を抱えているのが現状である（スポーツ庁、2021a,b；馬場、2021）。著者らが関わるスポーツ系大学の教育実践においても、スポー

ツ関連職を志望する学生が、自身のキャリアをどのように構築するのか、どのような職種と連携すべきか、また各職種が果たすべき役割について具体的に理解できていない場面が散見される。スポーツ分野の職業構造は、コーチング、医療、トレーニング、マネジメントなど、複数の専門職による連携・協働を前提とした複合的な構造を有しており、学生にとってキャリア像を具体的に描くことが容易ではない可能性が考えられる。

先行研究においても、スポーツ現場における多職種連携の重要性が繰り返し指摘されている。特にスポーツ医療分野では、アスリート支援における多職種連携の重要性とともに、卒前教育において、現場で求められる専門性や協働の在り方が十分に体系化されていないことが課

題として報告されている(高澤ほか, 2025)。また, 国立スポーツ科学センターにおける実践報告からは, 多職種連携は自然に成立するものではなく, 各専門職が相互の役割や専門性を理解しながら協働の形を模索してきた経緯が示されており, 現場における連携には職種間理解が不可欠であることが示唆されている(田中ほか, 2011)。

しかしながら, スポーツ系大学に在籍する学生を対象として, 将来のキャリア形成や他専門職との連携, 役割理解の実態を直接検討した研究は限定的である。このように, スポーツ現場で求められる多職種連携の実態と, 学生が有する職種理解・キャリア認識との間に乖離があるのではないかという問題意識が, 著者らの教育実践を通じて形成されてきた。

こうした課題の背景には, スポーツ分野における多職種連携の複雑さと, それに対する教育機会の不足が挙げられる。医療分野では, 質の高いチーム医療の実現を目的として多職種連携教育(Interprofessional Education, 以下「IPE」と略す)が確立されており, その教育的有効性が広く報告されている(Oudbier et al., 2024)。英国で設立されたCAIPE(Centre for the Advancement of Interprofessional Education)は, IPEを「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を向上させるために, 同じ場所でともに学び, お互いから学び合いながら, お互いのことを学ぶ機会」と定義している(CAIPE, 2002)。近年, 海外のみならず日本国内においても, 医療系学部を中心にIPEの導入が進み, 一定の教育効果が報告されている(Imafuku et al., 2018; Lee et al., 2019; Maeno et al., 2019; Spaulding et al., 2021; van Diggele et al., 2020; 川添ほか, 2018)。

一方, スポーツ分野におけるIPEに関する研究蓄積は極めて限定的である。Ulrich et al. (2022)は, スポーツ・運動医学分野においてIPEが文献上ほとんど扱われていないことを指摘している。アスリートのパフォーマンス向上と健康維持を両立させるためには, コーチ, トレーナー, 医師, 栄養士, 心理専門家など多様な専門職による統合的サポートが不可欠にもかかわらず(King et al., 2024), スポーツ分野を志向する学生が, これらの職種の役割や連携の在り方を体系的に学ぶ機会は限られている。実際に, アスレティックトレーニング教育においても, IPEを導入しているプログラムは半数に満たず, 制度的基盤や準備態勢の不足が課題となっている(Breitbach et al., 2018)。日本国内においても, スポーツ分野の多職種連携をテーマとした教育プログラムが一部で試みられるものの, スポーツ分野を志向する学生を対象として, その教育効果を体系的に評価し, 学習成果を検討するための実践的な測定枠組みも十分に整理されていないのが現

状である。さらに, スポーツ分野には, 医療分野とは異なり, 「プレイヤーズセンタード」の理念に基づき, アスリートのパフォーマンス向上と人間的成長を同時に支援するという特有の文脈が存在する(松尾, 2021)。この文脈を考慮したIPEモデルや評価枠組みは十分に整理されておらず, スポーツ分野を志向する学生のキャリア形成を効果的に支援するための教育的枠組みの構築が求められている。

以上の背景を踏まえ, 本研究では, スポーツ分野におけるキャリア形成支援の一環として, 多職種連携および協働に着目したスポーツに関連する多様な専門職によるIPE形式の教育プログラム(Interprofessional Education in Sports, 以下「IPE-S」と略す)をスポーツ・医療科学系の学部を有するスポーツ系大学に在籍する学生を対象に実施し, その教育効果を検証することを目的とする。

本研究課題は, IPE-Sプログラムの受講を通じて, 学生のスポーツ関連職種に対する役割理解や連携の重要性に関する認識がどのように変化するのか, さらに, そうした学びが学生自身のキャリア形成に対する内省や意識の変容とどのように関連するのかを明らかにすることである。

本研究では, これらの学習成果を定量的および定性的手法を組み合わせることで検討することにより, これまで十分に可視化されてこなかったスポーツ分野におけるIPEの教育的効果を多角的に捉えることを目指す。本研究は, スポーツ分野を志向する学生を対象としたIPEの教育効果を, 職種理解とキャリア形成という二つの学習成果の観点から体系的に評価した点に新規性を有する。さらに, 医療分野を中心に蓄積されてきたIPE研究とは異なり, スポーツ分野特有の文脈を踏まえつつ, 学生段階における職種理解とキャリア形成への影響を体系的に評価する点に, 本研究の独自性がある。得られた知見は, 今後のIPE-Sプログラムの設計および評価枠組みの構築に資する基盤的知見として位置づけられる。

方 法

1. 対象者

調査対象は, A大学健康科学部の1～4年次生および健康科学研究科修士課程1年次に在籍するスポーツ・医療科学系学生120名(受講者: 59名, 非受講者: 61名)とした。本研究におけるIPE-Sプログラムの受講は, 学生自身の意思による自己選択制であり, IPE-Sプログラムを受講した学生を受講群, 受講しなかった学生を非受講群として, 両群間で教育効果の比較・検討を行った。なお, 本研究では学部生および大学院生が混在しているため, 学年差に伴う年齢の違いがベースラインに影響する

可能性を考慮し、IPE-S プログラム事後アンケート回答時の年齢について群間比較を行った。年齢の比較には Welch の t 検定を用い、事後時点における年齢は、受講群が 20.76 ± 1.42 歳、非受講群が 19.95 ± 0.38 歳であり、受講群の年齢が有意に高かった ($p < 0.001$)。

2. 講義内容

IPE-S プログラムは、スポーツ現場に関わる多様な専門職による全12回（各回90分）のオムニバス形式の講義で構成された（表1）。本教育プログラムを通じてスポーツ現場における多職種の専門性および連携・協働の重要性と意義についての理解を深め、将来のキャリア選択に資する知識の獲得と意識の変容を促すねらいのもと、以下の3点を達成目標として設定した。

- ・達成目標1「スポーツに関わる多様な職種についての理解を深める」

- ・達成目標2「スポーツに関わる多様な職種の専門家との関係性を考察する」

- ・達成目標3「自身に求められる役割や責務について熟考する」

各講義の前半では、講師がそれぞれの専門職における業務内容や専門性、キャリア形成の過程について、自身の学生時代の取り組みやスポーツ現場との関わりを交えた経験や知識を体系化し教授した。後半では、他職種との連携事例や協働の成果、さらにはキャリア形成におけるアドバイスなどが提示された。また、各講義ではグループワークを授業内で実施し、学生同士が他のスポーツ関連職種との関わり方や連携・協働の重要性、将来の職業選択について意見交換を行うことを目的とした。各回で共通のファシリテーターが適宜問いかけや補足説明を行うことで、受講者の達成目標を補完するよう努めた。グループワークの成果物として、討議内容を踏まえた講義

表1 IPE-S プログラム講義概要

回	開催日	講師（職種）	実施形式	講義内容
1	2024/09/26	IPE-S プログラム統括教員	対面	IPE-S プログラムの概要説明
2	2024/10/03	公認スポーツ栄養士	オンライン	本講義では、地方におけるスポーツ栄養の実践を例に、多職種連携による支援の広がりとその意義について学んだ。原因追究や健康の可視化を通じた支援の重要性が示され、学生は、専門分野の枠を越えた経験の積み重ねや主体的な行動が、将来のキャリア形成につながることを考察した。
3	2024/10/10	公認スポーツドクター（内科医）	対面	本講義では、アスリートにみられる内科的疾患や症状を題材に、競技背景や生活環境を含めた包括的な評価と支援の重要性について学んだ。症例を通じて、内科的アプローチと栄養・メンタル・指導現場との多職種連携が、アスリートの回復やパフォーマンスに不可欠であることが示された。
4	2024/10/17	元アスリート・スポーツ指導者	対面	本講義では、アスリートとしての競技経験をもとに、競技活動中の意識や引退後のセカンドキャリア形成について学んだ。カテゴリーに応じた関わり方や信頼関係を築くコミュニケーションの重要性が示され、人とのつながりや経験の蓄積が将来のキャリア選択を広げることが理解された。
5	2024/10/18	公認スポーツドクター（整形外科医）	オンライン	本講義では、スポーツドクターの実際の活動を通じて、現場における他職種との連携の具体像を学んだ。専門性に加え、情熱・情報収集・主体的な行動が連携の起点となり、活動の場を広げていくことが示された。
6	2024/11/07	公認アスレティックトレーナー・鍼灸師	対面	本講義では、スポーツ現場で活躍する人に求められる資質として、専門性に加え、行動力やコミュニケーション能力、信頼関係を築く姿勢の重要性について学んだ。現場の実例から、裏方としての役割の広さや他職種との連携の実際が示された。
7	2024/11/14	公認スポーツドクター（精神科医） 公認心理師	対面	本講義では、スポーツ現場におけるメンタルヘルスの重要性と心理サポートの実践について学んだ。競技成績や行動の背景にある心理的要因を理解し、状況に応じた対応やレジリエンスの向上が求められることが示された。
8	2024/11/21	管理栄養士・パーソナルトレーナー	オンライン	本講義では、多職種連携の中でスポーツ栄養士が果たす役割や実践の実際について学んだ。厳しい環境下でも目標を持ち続け、知識を現場で活かす姿勢が、信頼関係の構築や活躍の場の拡大につながることを示された。
9	2024/12/05	公認アスレティックトレーナー	対面	本講義では、アスレティックトレーナーの実践を通じて、プレイヤーズセンターの視点に基づく支援と多職種連携の在り方について学んだ。傷害対応にとどまらず、運動・栄養・休養を含めた包括的な教育と継続的なコミュニケーションの重要性が示された。
10	2024/12/12	公認スポーツファーマシスト	オンライン	本講義では、スポーツファーマシストの実践を通じて、アンチ・ドーピングの重要性と多職種連携による選手支援の在り方について学んだ。市販薬やサプリメントを含む薬物使用のリスクが示され正確な情報提供と相談体制の必要性が理解された。
11	2024/12/19	公認アスレティックトレーナー	対面	本講義では、スポーツ現場におけるサポートチームの構築方法について、自身の強みを起点とした多職種連携の実践から学んだ。役割分担と人とのつながりを大切にし、主体的に行動する姿勢が、質の高い支援につながることを示された。
12	2025/01/09	公認スポーツ栄養士	対面	本講義では、スポーツ栄養士として活躍するために、学生時代から実践できる行動や姿勢について学んだ。目標を明確にし、思いや強みを発信しながら挑戦と経験を重ねることが、将来のキャリア形成につながることを理解された。

感想の記述を各回終了後に提出させ、これを通じて学生の学びや気づきをアウトプットさせた。

3. アンケート調査

アンケート調査は、保健・医療・福祉系学生を対象とした IPE の教育効果を測定するために Abe et al. (2019) によって開発された多職種連携学習尺度を、スポーツ関連職種向けに改変 (Interprofessional Learning Scale in Sports, 以下「IPLS-S」と略す) したうえで、Google フォームを用いて IPE-S プログラム事前・事後に受講者・非受講者を対象として同時期に実施した。スポーツ関連職種向けに改変するにあたり、Abe et al. (2019) の多職種連携学習尺度は医療系の学生を対象として開発されている。本研究においてもアスリートをサポートする医療系の進路に興味・関心の高い学生を対象としたことから、後述するスポーツ現場に関わる医師、薬剤師や管理栄養士など専門的知見を持つ実務家、研究者らで内容を検討し改変が可能だと判断した。講義の事前および事後に同一内容の質問紙調査を行い、6段階リッカート尺度 (1 = そう思わない ~ 6 = そう思う) により評価を求めた。得られたデータは量的に分析した。なお、回答の偏りを防止するための工夫として、一部の設問に逆転項

目を導入した。逆転項目については、得点の整合性を保つ目的で、6点を1点、5点を2点、1点を6点とするように得点の変換を行った。

18項目の質問 (表2a) は、以下の4つの下位尺度に分類された:

下位尺度 A グループ活動のリフレクション:

項目番号 5, 10, 12, 15

下位尺度 B グループ活動に対する態度:

項目番号 4, 8, 9, 13, 14

下位尺度 C スポーツ関連多職種連携・協働に関する知識:

項目番号 2, 3, 6, 16, 18

下位尺度 D グループ活動における技能:

項目番号 1, 7 (逆転項目), 11, 17

さらに、スポーツ現場における多職種連携の「意識」および「重要性認知」に関する2項目 (表2b) を追加した。なお、当該項目については6段階リッカート尺度 (1 = 重要でない ~ 6 = 重要) により評価した。また、スポーツ現場における多職種連携に関する自由記述を設け、参加学生の意識変化を質的に分析した。

表2 スポーツ関連多職種連携学習とスポーツ現場における多職種連携の「意識」および「重要性認知」の尺度

a スポーツ関連多職種連携学習の尺度

項目番号	質問内容
1	話し合いで、自分の意見を言うことができる。
2	私は、自分が目指す職業の特徴や役割を理解し、他人に説明することができる。
3	私は、スポーツにおける多職種連携について知っている。
4	私は、グループで何かをするときには、他のメンバーに信頼されるように努力する。
5	私は、グループ活動において、他のメンバーの感情、思考、言動がどのように推移していたのかを振り返って考えることがある。
6	私は、スポーツに関わる様々な職業の共通点と相違点を知っている。
7	グループ活動が苦手だ。
8	私は、グループで作業するときには、他のメンバーに自分のことを知ってもらおうと努力する。
9	私は、グループでの話し合いや活動では、全てのメンバーが意見を言いやすくなるような雰囲気作りを心がけている。
10	私は、グループ活動において、他のメンバーがどのような役割を果たしていたのかを振り返って考えることがある。
11	初めて会った人たちとも、すぐになじんでグループ活動を始めることができる。
12	私は、グループ活動において、自分の感情、思考、言動がどのように推移していたのかを振り返って考えることがある。
13	私は、グループ活動において、自分の言いたいことが、他のメンバーに伝わっているかどうか、意識しながら発言する。
14	私は、グループで作業するとき、他のメンバーを尊重し、信頼するようにしている。
15	私は、グループ活動において、自分の感情、考え方、発言が、他者からどのような影響を受けていたのかを振り返って考えることがある。
16	スポーツの領域において、取り組むべき課題を知っている。
17	グループ活動において、皆の意見を率先してまとめようとするほうだ。
18	私は、自分が目指す職種では解決できない問題があるときに、他のどの職種に依頼すれば良いかを知っている。

b スポーツ現場における多職種連携の「意識」および「重要性認知」の尺度

質問内容
スポーツ現場において、多職種連携をどの程度重要だと感じますか?
スポーツ現場に関わる様々な職業の共通点と相違点を知ることが、どの程度重要だと感じますか?

4. 分析方法

量的データは、IPLS-Sで得られる数値を、「受講」の有無（受講群・非受講群）および「時間」（IPE-S プログラム事前・事後）を要因とした反復測定二要因分散分析を実施し、「受講×時間」の交互作用が有意な場合はBonferroni法による単純主効果の検定を行い、統計解析ソフト「GraphPad Prism (ver. 8.4.3)」を使用した。有意水準は0.05とし、すべての値は、平均値±標準誤差で表した。

質的データは、スポーツ現場における多職種連携に関する自由記述を対象とし、テキスト型データを整理・分析する計量的テキスト分析手法としてテキストマイニングを用い、頻出語の分析および階層的クラスター分析を行い、「KH Coder (ver. 3.00)」を使用した（樋口, 2014）。頻出語の抽出においては、コーパス全体における語の出現回数を基に一覧化し、特定の出現回数の下限は設定せず、出現頻度の上位語を中心に分析を行った。そのうち、本研究では回答数と語彙数のバランスを考慮し、先行研究（森津, 2022）を参考に、分析結果の解釈の明瞭性を確保するため、頻度上位10語を中心に群間比較を行った。なお、11位以降の語についても文脈上重要な語が含まれる可能性があるが、本研究では記述的な比較の明瞭性を優先し、頻度上位10語を中心に報告した。

階層的クラスター分析（Jaccard 距離に基づく凝集型、Ward 法）においては、抽出された語の共起関係に基づいて共起行列を作成し、多変量解析を行った。その際、階層的クラスター分析の結果として得られたデンドログラムに基づき、表として提示可能な水準で3つのクラスターを採用した。共起関係の判定は、KH Coder の標準設定に基づいて自動的に行った。また、特定の停止語リストは使用せず、形態素解析にはMeCab (IPA 辞書)を用い、名詞・サ変名詞・動詞（基本形）・形容詞・形容動詞のみを分析対象とした。頻出語の記述的な特徴を示すため、まず解析対象となった全語の頻度を算出し、上位語から順にリスト化した。

本研究で採用した自由記述分析の方法は、先行するキャリア関連研究で用いられている手法と整合的である。九鬼ほか（2023）は、KH Coderを用い、大学生のキャリアイメージについて、学部横断型キャリア教育の前後でどのような変化が生じるかを、自由記述データに基づくテキストマイニングによって分析している。具体的には、男女別に頻出語上位の抽出および共起ネットワーク分析を行い、キャリア教育前後における語の出現傾向や関連構造の違いを明らかにしている。また、初見ほか（2021）は、大学生を対象にインターンシップ参加後の変化を検討する際、その効果を再定義する試みとして自由記述の

テキスト分析を採用し、多様な効果を探索的に捉えることができる」と論じている。その背景として、選択肢形式の質問は被験者にバイアスを与える可能性があることや、あらかじめ設定された選択肢では、選択肢として存在しない効果を捉えられない可能性がある点が指摘されている。これらの先行研究では、自由記述の分析により、量的尺度では捉えにくいキャリア意識の多様性や構造的変化が示されており、本研究において得られた意識の変容に関する解釈も、同様の分析枠組みに基づくものとして理解可能であると考えられる。以上のことから、本研究でもテキストマイニング分析を採用し、教育前後における頻出語の差異を検討するとともに、共起ネットワーク分析に代えて階層的クラスター分析を用いることで、語の共起関係およびその構造的特徴について分析を進めた。

本研究では、「受講者・事後」群の自由記述を対象に階層的クラスター分析を実施し、抽出された各クラスターに対してフレームの命名を行った。なお、多職種連携学習尺度の改変、フレーム名称の検討にあたっては、医師・公認スポーツドクター、薬剤師・公認スポーツファーマシスト、管理栄養士、生理学、スポーツ社会学、スポーツマネジメントなどの専門分野において研究実績、多職種連携に対する取り組みや経験を持つ実務家および研究者の協力を得て、文脈に即した適切な表現となるよう精査を行った。

5. 倫理的配慮

本調査は倫理的原則に則り、A 大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：274）を得て実施した。対象者には、講義開始時に本講義および調査の趣旨を説明し、得られたデータは個人が特定されない形で公表されることを保証した上で、本研究への参加に同意した者のデータのみを解析に用いた。また、アンケートの回答内容が成績評価に一切影響を与えないことを説明した。さらに、調査への協力は自由意思に基づくものであり、一度同意した場合でも、いつでも同意を撤回できることを対象者に説明した。

結 果

1. 定量評価の結果

IPE-S プログラムの効果を定量的に検証するため、IPLS-Sの総得点を従属変数とし、「受講」（受講群・非受講群）と「時間」（事前・事後）を要因とした反復測定二要因分散分析を行った。その結果、「受講」の主効果 ($F(1,118)=11.94, p<0.001$)、「時間」の主効果 ($F(1,118)=29.78, p<0.001$)、および「受講×時間」の交互作用効果 ($F(1,118)=7.82, p<0.01$) がいずれも有意であった。

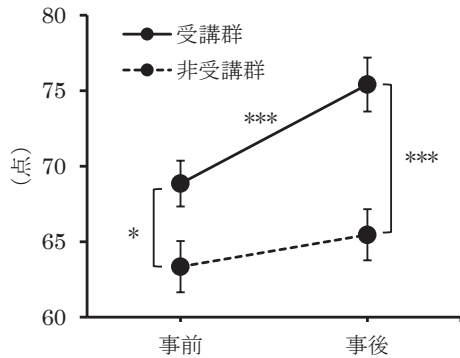


図1 スポーツ関連多職種連携学習尺度の総得点
単純主効果 (Bonferroni 法) における統計学的有意差を示す
(* $p < 0.05$, *** $p < 0.001$)

そこで交互作用の内訳を検討するため単純主効果の検定を行ったところ、受講群において事前と事後の得点に有意な上昇が認められた ($p < 0.001$) 一方、非受講群では有意な変化は認められなかった ($p = 0.120$)。群間比較では、事前時点においても受講群の得点 (68.85 ± 1.52) は非受講群 (63.34 ± 1.70) より有意に高く ($p < 0.05$)、事後時点においても受講群の得点 (75.41 ± 1.79) の方が非受講群 (65.46 ± 1.69) より有意に高く ($p < 0.001$)、その差はさらに顕著となっていた (図1)。

4つの下位尺度に関する分析では、「下位尺度Aグループ活動のリフレクション」においては、「時間」の主効果のみが有意であったが ($F(1,118) = 9.82$, $p < 0.01$)、「受

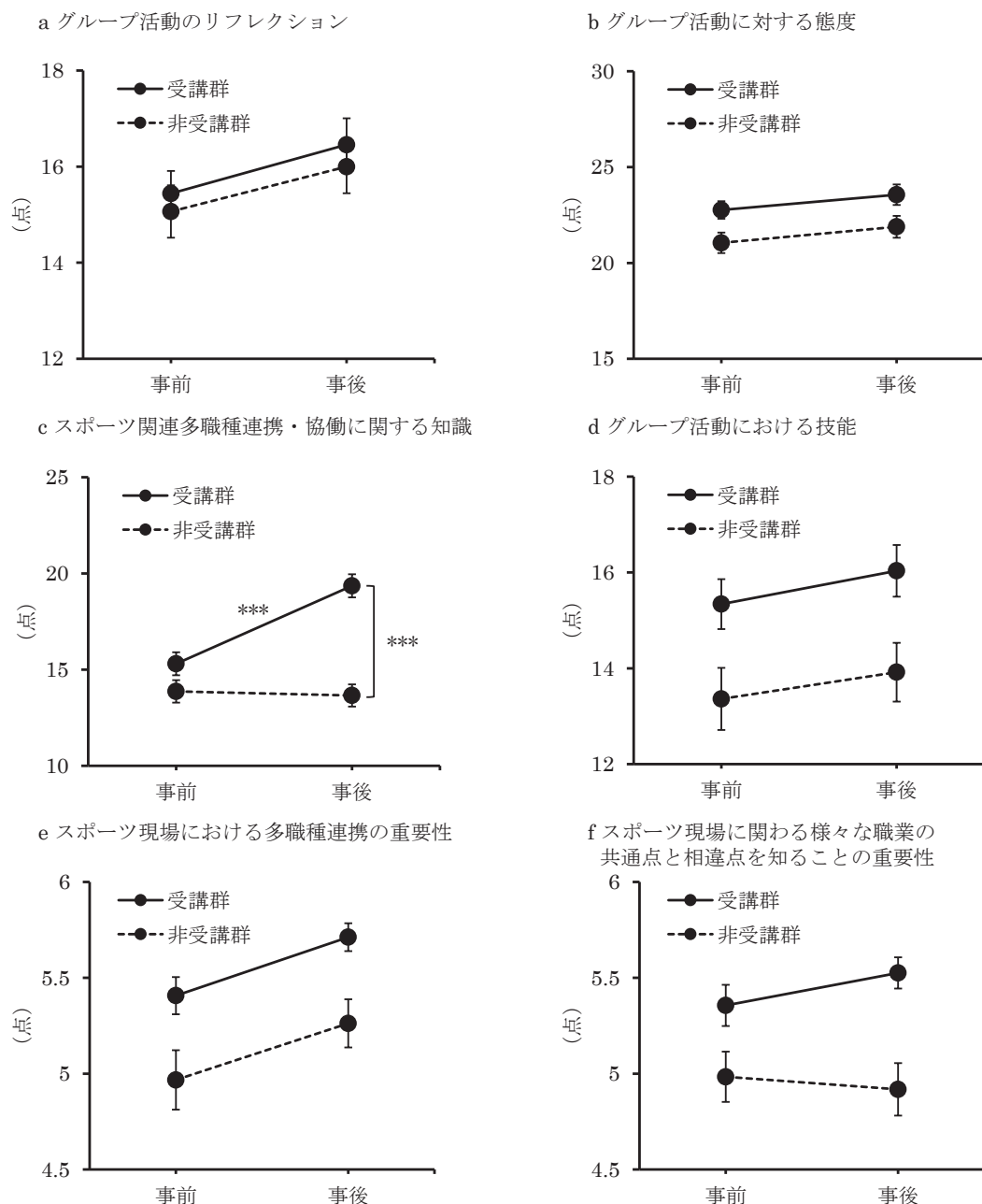


図2 a-d スポーツ関連多職種連携学習の下位尺度と e, f スポーツ現場における多職種連携の「意識」および「重要性認知」尺度の得点
単純主効果 (Bonferroni 法) における統計学的有意差を示す (*** $p < 0.001$)

講」の主効果および「受講×時間」の交互作用効果はいずれも有意ではなかった。ただし、受講群でのみ事後得点有意に上昇した ($p < 0.05$) (図 2 a)。「下位尺度 B グループ活動に対する態度」では、「受講」($F(1,118) = 5.93, p < 0.05$) および「時間」($F(1,118) = 9.14, p < 0.01$)の主効果が有意であった。一方、「受講×時間」の交互作用効果は有意でなかった (図 2 b)。「下位尺度 C スポーツ関連多職種連携・協働に関する知識」では、「受講」($F(1,118) = 23.23, p < 0.001$) および「時間」($F(1,118) = 24.93, p < 0.001$)の主効果に加え、「受講×時間」の交互作用効果が有意であった ($F(1,118) = 30.77, p < 0.001$)。そこで交互作用の内訳を検討するため単純主効果の検定を行ったところ、受講群でのみ事後得点の有意な上昇が認められた ($p < 0.001$)。また、事後の群間比較においても受講群の得点は非受講群より有意に高かった ($p < 0.001$) (図 2 c)。「下位尺度 D グループ活動における技能」については、「受講」($F(1,118) = 6.68, p < 0.05$) および「時間」($F(1,118) = 6.98, p < 0.01$)の主効果が有意であったが、一方、「受講×時間」の交互作用効果は有意でなかった (図 2 d)。

さらに、スポーツ現場における多職種連携の「意識」および「重要性認知」に関する 2 つの尺度の得点についても反復測定二要因分散分析を行った。「スポーツ現場における多職種連携の重要性」では、「受講」($F(1,118) = 9.89, p < 0.01$) および「時間」($F(1,118) = 11.67, p < 0.001$)の主効果が有意であった一方、「受講×時間」の交互作用効果は有意ではなかった。ただし、受講群・非受講群の双方において事後得点有意に上昇した ($p < 0.05$) (図 2 e)。「スポーツ現場に関わる職業の共通点と相違点の重要性認識」では、「受講」の主効果のみが有意 ($F(1,118) = 11.89, p < 0.001$) であり、他の効果には有意な差は見られなかった。ただし、事後の群間比較では受講群の得点が非受講群より有意に高かった ($p < 0.001$) (図 2 f)。

2. 自由記述の解析結果

表 3 は、「非受講者・事前」、「非受講者・事後」、「受講者・事前」、「受講者・事後」の各群から回収したアンケートの自由記述をもとに抽出した、頻出語上位 10 語を示したものである。今回、スポーツ関連多職種連携をテーマとした教育プログラムを展開したことから、「職種」や「連携」といった語は、いずれの群においても上位に示された。一方、「受講者・事後」群においては、「自分」という語の出現頻度が相対的に高い傾向が確認された。この語は、「非受講者・事前」(3 回)、「非受講者・事後」(5 回)、「受講者・事前」(7 回)と他群でも出現はしているものの、「受講者・事後」では 24 回と著しく増加し、上位 10 語にランクインする語となった。以下に、「自分」に関連する主な自由記述を示す。

- ・「全セミナーを通して、自分から行動に移す大切さを感じた。」
- ・「可能性を見つけて自分にできることを広げていく行動力と、他に依頼し巻き込んでいくことの両方の重要性を学びました。」
- ・「目の前のことに全力で取り組み、自分のキャリアを作っていきたいと思います。」
- ・「実際に現場に立っている人のリアルをたくさん聞き出すことができ、これからの自分のやりたいことに活かしたいと思いました。」
- ・「自分の分野を極め、自分では分からない事はその専門家を頼ることでより良いサポートができると思った。」
- ・「将来の為にすごくなったし、自分はどのような職業に就きたいのかが少し見えてきたかなとも思いました。」

このように、「受講者・事後」群では、講義内容を自身の行動や態度と関連づけて捉えようとする傾向が確認された。さらに、表 4 には「受講者・事後」群における自由記述を対象として階層的クラスター分析を行い、その分類結果および各クラスターにおけるフレームを示した。加えて、表 5 には本教育プログラムにおける 3 つの達成

表 3 自由記述頻出語上位 10 語

非受講者・事前 抽出語 (出現回数)		非受講者・事後 抽出語 (出現回数)		受講者・事前 抽出語 (出現回数)		受講者・事後 抽出語 (出現回数)	
1	思う (52)	思う (41)	思う (55)	職種 (53)			
2	職種 (37)	連携 (39)	連携 (54)	思う (45)			
3	連携 (30)	スポーツ (33)	職種 (43)	連携 (40)			
4	スポーツ (23)	職種 (31)	スポーツ (30)	スポーツ (33)			
5	現場 (14)	知る (21)	現場 (24)	現場 (28)			
6	選手 (14)	現場 (18)	選手 (23)	自分 (24)			
7	知る (12)	考える (13)	知る (23)	人 (21)			
8	様々 (11)	重要 (13)	考える (14)	聞く (21)			
9	大切 (10)	選手 (12)	人 (14)	大切 (21)			
10	多い (9)	人 (11)	専門 (14)	知る (20)			

表4 「受講者・事後」の群を対象としたクラスター毎のフレーム名称

フレーム名称	構成する用語	出現数の合計 (回)
キャリア形成における他者理解と自己実現 (クラスター1)	知る (20), 人 (21), 思う (45), 自分 (24)	110
スポーツ現場における多職種連携の理解 (クラスター2)	スポーツ (33), 現場 (28)	61
多職種連携に対する理解の深化 (クラスター3)	聞く (21), 大切 (21), 職種 (53), 連携 (40)	135

表5 IPE-S プログラムの達成目標と「受講者・事後」の群を対象としたクラスター毎のフレームとの関連

達成目標	関連があると考えられるフレーム	各フレームの主な感想
1. スポーツに関わる多様な職種についての理解を深める	スポーツ現場における多職種連携の理解フレーム (クラスター2)	・選手だけでなく、共に仕事を行う職種についても理解と知識を深めることは、スポーツ現場で働く上でとても重要であることを知りました。 ・スポーツ現場で活躍している方の話を聞けば聞くほど、やはり実際に現場に出てみないと分からない事が多そうだなと思った。 ・スポーツ現場において様々な職種が連携して活動をしていると改めて知ることができました。 ・様々なスポーツ現場の多職種の方のセミナーが聞くことができ、色んな角度からスポーツをやっている方に携わっていることが分かりました。 ・色んな多職種の方からお話が聞けて、スポーツ現場で活躍される方々のリアルな話がとても勉強になりました。 ・様々な職業の方からスポーツ現場とはどういうところでどのように活動をしているのかなどを細かく教えていただいて、とても貴重な体験でした。
2. スポーツに関わる多様な職種の専門家との関係性を考察する	多職種連携に対する理解の深化フレーム (クラスター3)	・講義前は多職種連携についてほとんど知識がなかったが、講義を通してスポーツ1つにおいても、様々な職種が連携していることが理解できた。 ・現場で多職種連携されている方のお話も聞くことが出来て、実際にどのような考え方やスキルが必要かがわかった。 ・単にトレーナーや医師がいるだけではなく、様々な職種と協力してサポートをしていくことを学ぶことができました。 ・どの職種がどんな役割を果たしているのか、何となく理解はしつつあるけれど実際の現場をみた方が連携についてつかめそうだと思う。 ・他職種連携を行うことは簡単なことではなく、1つの職種だけでも欠けると選手への影響が大きくなるということを感じることができました。 ・管理栄養士だけではなく多職種連携をすることで活動の幅が大きく広がることや対象者に対してもっと細かく深いサポートができると感じた。
3. 自身に求められる役割や責務について熟考する	キャリア形成における他者理解と自己実現フレーム (クラスター1)	・全セミナーを通して、自分から行動に移す大切さを感じた。 ・可能性を見つけて自分にできることを広げていく行動力と、他に依頼し巻き込んでいくことの両方の重要性を学びました。 ・自分が仕事をする上、もしくは仕事を始める以前に、多職種の人と繋がっておくことも重要で積極的に人脈をつくっておくと、自身が困ったときの助けになると思う。 ・目の前のことに全力で取り組み、自分のキャリアを作っていきたいと思います。 ・実際に現場に立っている人のリアルをたくさんお聞きすることができて、これからの自分のやりたいことに活かしたいと思いました。 ・将来自分もスポーツ現場に関わってみたいと思っているので、繋がりもとても大切であることを知ることが出来たとても良い機会を頂きました。 ・自分の分野を極め、自分では分からない事はその専門家を頼ることでより良いサポートができると思った。

目標と各フレームとの対応関係を整理した。

- ・クラスター1は、「知る」「人」「思う」「自分」といった語から構成され、自身の将来や行動、態度への気づきが見られたことから、「キャリア形成における他者理解と自己実現フレーム」と命名した。このクラスターは、達成目標3「自身に求められる役割や責務について熟考する」を達成していると判断される。
- ・クラスター2は、「スポーツ」「現場」といった語によって構成され、スポーツ現場への関心の高まりが読み取れたため、「スポーツ現場における多職種連携の理解フレーム」と命名した。このクラスターは、達成目標1「スポーツに関わる多様な職種についての理解を深める」を達成したと考えられる。
- ・クラスター3は、「聞く」「大切」「職種」「連携」と

いった語から構成され、多職種連携に対する理解や期待の深まりが示された。このことから、「多職種連携に対する理解の深化フレーム」と命名し、達成目標2「スポーツに関わる多様な職種の専門家との関係性を考察する」が達成されたと結論づけた。

考 察

本研究は、スポーツ分野における多職種連携の理解促進を目的としてIPE-Sプログラムを実施し、その教育効果を量的および定性的手法を用いて評価した。以下では、得られた結果を先行研究と関連付けながら解釈し、本研究の学術的意義と実践的含意を論じる。

1. IPE-S プログラムの定量的評価結果の解釈

定量的評価では、IPLS-Sの総得点に有意な差が認められたことから、本教育プログラムが多職種連携に対する理解の深化に効果を有する可能性が示唆された。特に、「スポーツ関連多職種連携・協働に関する知識」および「グループ活動のリフレクション」の下位尺度において、受講群でのみ事後得点が有意に上昇し、非受講群では有意な変化が確認されなかった。これらの結果は、本教育プログラムが単なる知識の伝達にとどまらず、学習者が講義内容を自己の経験や将来像と関連づけて再解釈する内省的学習過程を促した可能性を示すものと考えられる。この点は、IPEにおいて専門職理解や協働に関する認識の変容が主要な学習成果の一つとされている先行研究の知見とも整合している（Ho et al., 2022；厚生労働省, 2018）。

本教育プログラムでは、多様な専門職による講義とグループワークを組み合わせた学習機会を提供した。このような能動的学習を含む構成は、IPEの学習成果を高める教育方略として報告されている（Oudbier et al., 2024）。本研究のグループワークは、学習者が他者との対話を通して自らの理解を再構成する契機となり、「知識」および「リフレクション」の得点上昇に結びついた可能性がある。また、これまで主に医療分野で蓄積されてきたIPEの枠組みが、スポーツ分野という異なる教育文脈においても一定程度適用可能であることを、定量的データに基づいて示した点は学術的意義があると考えられる。

一方で、「グループ活動に関する技能」や「態度」に関しては、受講群・非受講群ともに有意な変化は見られなかった。このことは、グループワークにおいて各回で統一された詳細なテーマ設定や人数、十分な討議時間が必ずしも確保されていなかったことに加え、討議の深まりに回ごとの差が認められた点を反映した結果である可能性がある。加えて、短期間の教育介入では、行動変容や態度変容を十分に捉えることが困難であるとするIPE研究の一般的な見解とも一致し（Reeves et al., 2016；鈴木ほか, 2012）、より長期的かつ体験的な教育内容の導入が必要であることを示唆している。さらに、本研究における評価指標は自己評価尺度に依存しており、行動評価が含まれていない点についても、測定上の制約として留意すべきであろう。

また、「スポーツ現場における多職種連携の重要性」に関する認識が、同時期にアンケート調査を実施した非受講群においても事後で向上していたことは、学内での教育的雰囲気や同年代の仲間が教育的に高め合うことによって生じたピア効果の影響など（Hoxby, 2000）、間接的な効果の可能性が考えられる。本研究では受講群と非

受講群は同一学部内で学修・交流する環境にあり、学内掲示物を通じて本教育プログラム関連情報に接する機会が共有されていたことから、自然な情報共有が生じ得る状況であったと考えられる。これらの要因により、非受講者群においても認識の変化が生じた可能性があり、このような波及効果は、IPE-Sの教育的影響が受講者に限定されない可能性を示しており、教育環境全体の設計においても注視すべき点である。

これらの結果を先行研究と照らし合わせると、短期間のIPEでは、主として知識や認知的理解の変化が捉えられやすく、技能や態度といった行動レベルの変容は捉えにくいとされている点と一致している（Reeves et al., 2016）。本研究においても、「知識」および「リフレクション」に有意な変化が認められた一方で、「技能」や「態度」には明確な変化が確認されなかったことは、スポーツ分野という文脈においても、IPEの学習成果が段階的に現れる可能性を示すものと解釈できる。

2. 自由記述分析からみた学習の質的变化

自由記述分析においては、「受講者・事後」群において「自分」という語の出現頻度が著しく増加していたことから、受講者が講義内容を自己に関連づけて捉え直そうとしていた傾向が示唆された。この傾向は、IPE-Sが内的動機づけを喚起し、学びを自分事として捉えるきっかけとなっている可能性が示唆されており、単なる知識習得を超えた教育的意義があると考えられる。さらに、受講者・事後群を対象とした階層的クラスター分析により抽出された「キャリア形成における他者理解と自己実現」「スポーツ現場における多職種連携の理解」「多職種連携に対する理解の深化」の3つのフレームは、本教育プログラムが設定した達成目標と整合しており、多面的な学びが促進されたことを示している。これらの結果は、IPEが学習者に多面的な理解や内省を促す教育的枠組みであるとする先行研究の報告とも一致しており（竹鼻ほか, 2024；酒井, 2013）、本研究はその枠組みがスポーツ分野においても成立し得ることを示した点に意義があると考えられる。さらにこのことは、スポーツ分野において、IPEが学習者の内省やキャリア認知と関連した質的变化をもたらし得ることを、自由記述データを用いて具体的に可視化した点に本研究の特徴があると考えられる。

3. 達成目標に基づく定量・定性的評価結果の解釈

本研究で設定した各達成目標について、定量的および定性的評価の対応関係を整理すると、達成目標1「スポーツに関わる多様な職種についての理解を深める」については、「下位尺度C スポーツ関連多職種連携・協働に関

する知識」において、「受講×時間」の交互作用が有意であり、受講群のみで事後得点の有意な上昇が認められた。さらに、事後における群間比較においても受講群の得点が非受講群より有意に高かった。加えて、自由記述分析では、スポーツ現場における多職種やその役割への理解を示す語句が多く抽出され、クラスター分析においても「スポーツ現場における多職種連携の理解」を示すフレームが確認された。これらの結果を総合すると、達成目標 1 は、定量的・定性的の両側面から比較的強く裏づけられた教育目標であったと解釈できる。

達成目標 2 「スポーツに関わる多様な職種の専門家との関係性を考察する」については、「下位尺度 B グループ活動に対する態度」および「下位尺度 D グループ活動における技能」において、「受講」および「時間」の主効果が認められたものの、「受講×時間」の交互作用は有意ではなかった。一方、自由記述分析では、多職種間の関係性や協働の重要性、専門家同士の役割分担に言及する記述が確認され、クラスター分析においても「多職種連携に対する理解の深化」を示すフレームが抽出された。これらの結果から、達成目標 2 は、態度や技能の行動的変容には至らなかったものの、認知的理解の深化という水準において一定程度裏づけられたと推察される。

達成目標 3 「自身に求められる役割や責務について熟考する」については、「下位尺度 A グループ活動のリフレクション」において時間の主効果が有意であり、受講群においてのみ事後得点の上昇が認められた。ただし、群間差や交互作用は確認されていない。一方、自由記述分析では、「自分」という語の出現頻度が受講者・事後群で顕著に増加しており、将来像や自身の役割、行動に関する内省的記述が多く見られた。したがって、達成目標 3 は、短期的な教育介入の範囲において、行動変容として定量的に捉えられる段階には至っていないものの、内省・認知レベルでの変化が示唆された段階にとどまると考えられる。

4. スポーツ分野における IPE-S の意義

IPE は医療現場を中心に発展してきた教育モデルであるが (CAIPE, 2002), スポーツ分野における多職種連携は、治療やケアの提供に限定されるものではなく、競技活動を行う主体を中心に据え、競技成績の向上と安全確保を両立させながら、主体的な学びや成長を支援する点に特徴がある。このような考え方は、日本スポーツ協会が提唱する「プレイヤーズセンタード」の理念に示されるように、スポーツに関わる支援者が共通の価値観を共有し、競技者を中心とした支援を実現するために協働する姿勢を重視するものである (松尾, 2021)。こうした

多職種連携の在り方は、スポーツ庁が示すスポーツ現場における連携体制の指針とも方向性を共有するものであり、競技現場・支援現場・マネジメントを横断した協働の重要性が強調されている (スポーツ庁, 2021a,b)。

以上を踏まえると、本研究で実施した IPE-S プログラムは、医療現場における IPE の枠組みを単純にスポーツ分野へ転用したものではなく、プレイヤーズセンタードの理念を基盤として、スポーツ現場特有の多職種協働の構造や実践的課題を教育的に可視化し、将来のキャリア形成と結びつけて理解を促すことを目的とした試みであったと位置づけることができる。本研究は、Ulrich et al. (2022) が指摘したスポーツ・運動医学分野における IPE 研究の空白を埋める実証的試みとしての意義を持つ。さらに、King et al. (2024) がハイパフォーマンススポーツを対象として示したスポーツ現場における多職種連携の協働関係の基盤を、卒業前の段階で育む上での初期的な一歩となる可能性を示唆している。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究結果の解釈にあたっては、いくつかの研究上の制約を踏まえる必要がある。第一に履修の自己選択制および受講群と非受講群の学年構成の違いが、結果に影響した可能性がある。事前時点において、受講群の IPLS-S 総得点が非受講群より高い傾向を示しており、これは IPE-S や将来のキャリア形成に対する関心が相対的に高い学生が、本プログラムを自己選択的に履修した可能性を反映していると考えられる。また、受講群の年齢が有意に高かったことから、上級学年生や大学院生を含む学年構成の違いが、既存の専門職理解や多職種連携に対する認識の差として事前得点に影響を及ぼした可能性も否定できない。したがって、本研究の結果には教育介入の効果に加え、事前の関心や動機づけの差が影響している可能性がある点に留意する必要がある。

第二に、本教育プログラムは講義中心かつ短期間の教育介入であり、実践的な多職種連携体験の機会は限定的であった。今後は、シミュレーションや現場実習等の体験的な学習を組み込んだ長期的・継続型の設計を通じて、技能や態度といった行動レベルの学習成果の変容を促すことが求められる。

第三に、評価は自己評価尺度を中心としており、客観的な行動評価を含まない。加えて、自由記述に対するテキストマイニング分析についても解釈上の制約を伴う。とりわけ、「自分」といった自己言及語の出現頻度の変化は多義的であり、内省の深化や動機づけの高まりのみを直接的に示すものではない。また、他の IPE 研究やキャリア教育研究における自由記述データとの直接的な比較

や基準値の設定を行っていないため、観察された変化が本プログラムに特有のものであるかを判断することには限界がある。

以上を踏まえると、本研究で示された教育的効果は限定的に捉える必要がある。今後は、無作為化や学年調整を行った研究デザイン、体験的学習を含む長期的プログラムの構築、およびキャリア関連指標を含む多面的評価手法の導入を通じて、IPE-Sの教育的効果をより厳密に検証していくことが求められる。

結 論

以上より、本研究で実施したIPE-Sプログラムは、スポーツ・医療科学系学生を対象とした短期間の教育実践として、スポーツ現場における多職種連携に関する理解に一定の変化が認められた。これらの結果を踏まえると、IPE-Sは受講者が自身の学びを内省的に捉え直す契機となり得ることが示唆された。これらの知見は、スポーツ現場における多職種連携に関する知識理解や内省を促す教育的手法として機能し得る可能性を有するものと考えられる。

一方で、本研究は短期間の介入および自己評価尺度に基づく測定といった制約を有しており、得られた結果を一般化して解釈することには慎重さが求められる。今後は、スポーツ・医療科学系学生のスポーツ分野におけるキャリア形成支援を推進する観点から、今回の知見を基に、より実践的かつ継続的なIPE-Sプログラムの開発・実施を通じて、技能や態度の変容との関連を検証し、スポーツ現場で求められる多職種連携・協働スキルの涵養にどのように寄与し得るのかを検討していく必要がある。

付 記

論文の作成にあたり、文章表現の推敲および論理構成の整理を目的として、OpenAI社が提供する有償版ChatGPT(GPT-4.1)を、PCのウェブブラウザ環境にて使用した。生成された文章はすべて筆者が確認・修正のうえ、最終的な内容とした。

謝 辞

本教育プログラムにおいてご講義を賜りました、池田樹広先生（清恵会病院 整形外科）、薄墨聖子先生（株式会社セガファーマ サザン調剤薬局）、奥村正樹先生（合同会社 足夢）、河原一仁先生（朝日医療専門学校 広島校）、喜多みのり先生（株式会社 ほおぼる）、中嶋希和先生（筑波大学大学院 人間総合科学学術院）、長島未央子先生（九州産業大学 人間科学部スポーツ健康科学科）、西村幸秀先生（一般財団法人療道協会 西山病院）、原知

之先生（大阪大学大学院 医学系研究科内分泌・代謝内科学）、室谷好紀先生（三菱京都病院）、森嶋和樹先生（龍谷大学 スポーツ・文化活動強化センター）、吉村俊亮先生（株式会社 AND-U）に深く御礼申し上げます。

本教育プログラムの実施にあたりご協力を賜りました、至学館大学の笹竹英穂先生（大学院健康科学研究科）、井上啓子先生、藤田静子先生（栄養科学科）、水谷未来先生（体育科学科）、竹下俊一先生、足立美都樹先生（アスレティック・デパートメント）、竹井喜美先生（健康科学研究所）に心より感謝申し上げます。また、本論文の作成にあたり貴重なご助言を賜りました中村三喜雄先生（てんじん薬局）に深く感謝申し上げます。最後に、ウェブアンケートにご協力いただいた対象学生の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- Abe, H., Yada, H., Yamamoto, T., and Sohma, H. (2019) Development of the undergraduate version of the interprofessional learning scale. *Journal of Allied Health*, 48: 3-10.
- 馬場宏輝 (2021) アスレティックトレーナーの現状に関する研究：職業の社会的地位に着目して. *千葉体育学研究*, 42 : 9-19.
- Breitbach, A.P., Eliot, K., Cuppett, M., Wilson, M., and Chushak, M. (2018) The progress and promise of interprofessional education in athletic training programs. *Athletic Training Education Journal*, 13: 57-66.
- CAIPE (2002) About CAIPE, <https://www.caipe.org/about>, (参照日：2025年4月9日)。
- 初見康行・梅崎修・坂爪洋美 (2021) 大学生のインターンシップ効果測定尺度の開発—テキスト分析とパネルデータによる実証研究—. *日本労務学会誌*, 21 : 18-42.
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. ナカニシヤ出版。
- Ho, J.M., Wong, A.Y., Schoeb, V., Chan, A.S., Tang, P.M., and Wong, F.K. (2022) Interprofessional team-based learning: A qualitative study on the experiences of nursing and physiotherapy students. *Frontiers in Public Health*, 9: 706346.
- Hoxby, C.M. (2000) Peer effects in the classroom: Learning from gender and race variation. NBER Working Paper, 7867.
- Imafuku, R., Kataoka, R., Ogura, H., Suzuki, H., Enokida, M., and Osakabe, K. (2018) What did first-year students experience during their interprofessional education? A qualitative analysis of e-portfolios. *Journal of Interprofessional Care*, 32: 358-366.
- 川添恵理子・安部博史・三国久美・山田律子・石角鈴華 (2018) 医療系総合大学の多職種連携教育が看護学生の多職種連携コンピテンシーに及ぼす効果. *北海道医療大学看護福祉学部学会誌*, 14 : 3-10.
- King, R., Yiannaki, C., Kiely, J., Rhodes, D., and Alexander, J.

- (2024) Multi-disciplinary teams in high performance sport: The what and the how—A utopian view or a darker reality. *Journal of Expertise*, 7: 149–174.
- 厚生労働省 (2018) 看護師等学校養成所における専門職連携教育の推進方策に関する研究—平成29年度 総括・分担研究報告書—. 厚生労働科学特別研究事業, https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2017/201706025A.pdf, (参照日: 2026年1月31日).
- 九鬼成美・梅崎修・田澤実 (2023) 学部横断型キャリア教育が大学生のキャリアイメージに及ぼす影響—ジェンダー分析を通して—. *生涯学習とキャリアデザイン*, 21: 103–113.
- Lee, B., Phrasisombath, K., Shinozaki, H., Vangkonevilay, P., Boupavanh, K., Prabouasone, K., Sounthavong, O., Tokita, Y., Makino, T., Matsui, H., Saitoh, T., Tozato, F., Kama, A., and Watanabe, H. (2019) Key factors affecting the integration of interprofessional education into human resources for health reform: A Lao People's Democratic Republic case study. *Journal of Interprofessional Care*, 33: 356–360.
- Maeno, T., Haruta, J., Takayashiki, A., Yoshimoto, H., Goto, R., and Maeno, T. (2019) Interprofessional education in medical schools in Japan. *PLoS ONE*, 14: e0210912.
- 松尾哲矢 (2021) それは、まさに必然だった プレーヤーズセンター推進の理由. *Sport Japan*, 56: 4–6.
- 森津千尋 (2022) 2020年オリンピック東京大会におけるスポンサーシップと新聞報道. *スポーツ社会学研究*, 30: 85–99.
- Oudbier, J., Verheijck, E., van Diermen, D., Tams, J., Bramer, J., and Spaai, G. (2024) Enhancing the effectiveness of interprofessional education in health science education: A state-of-the-art review. *BMC Medical Education*, 24: 1492.
- Reeves, S., Fletcher, S., Barr, H., Birch, I., Boet, S., Davies, N., McFadyen, A., Rivera, J., and Kitto, S. (2016) A BEME systematic review of the effects of interprofessional education: BEME Guide No. 39. *Medical Teacher*, 38: 656–668.
- 酒井郁子 (2013) 総合大学医療系3学部の専門職連携教育プログラムを開発した教職員の連携とコミュニケーション. *日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌*, 4: 26–30.
- Spaulding, E.M., Marvel, F.A., Jacob, E., Rahman, A., Hansen, B.R., Hanyok, L.A., Martin, S.S., and Han, H.R. (2021) Interprofessional education and collaboration among healthcare students and professionals: A systematic review and call for action. *Journal of Interprofessional Care*, 35: 612–621.
- スポーツ庁 (2022) 第3期スポーツ基本計画, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm, (参照日: 2025年9月9日).
- スポーツ庁 (2021a) スポーツに関わる人材の育成と活躍の場の確保, https://www.mext.go.jp/sports/content/20211007-spt_sseisaku01-000018303_02.pdf, (参照日: 2025年9月9日).
- スポーツ庁 (2021b) スポーツキャリアサポート支援事業におけるスポーツ人材の効果的な活用のための基礎的調査研究, https://www.mext.go.jp/sports/content/20240522-spt_sposeisy-000013625_2.pdf, (参照日: 2025年9月9日).
- 鈴木明子・井上映子・坂下貴子・奥百合子・増田真弓・長井栄子・太田幸雄・飯田加奈恵 (2012) Interprofessional education (IPE) プログラム実施報告—看護学生の気づきと学び—. *城西国際大学紀要*, 21: 1–10.
- 高澤祐治・深尾宏祐・塩田有規・小松孝行・染谷由希・井澤秀典・室伏由佳・窪田敦之・野津将時郎・内野小百合・塩澤淳・山口達也・青柳壮志・長尾雅史 (2025) スポーツ医学と多職種連携. *日本臨床スポーツ医学会誌*, 33: 240–242.
- 竹鼻ゆかり・工藤浩二・齋藤千景・朝倉隆司・伊藤秀樹・籠谷恵・北澤武 (2024) 学校における多職種連携の理解を促すためのリフレクティングを援用した教育方法の検討. *東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系*, 76: 127–137.
- 田中みほ・待鳥浩司 (2011) アスリートへのメンタルサポートにおける多職種による協働に向けて. *スポーツ精神医学*, 8: 64–67.
- Ulrich, G., Carrard, J., Nigg, C. R., Erlacher, D., and Breitbach, A. P. (2022) Is healthcare a team sport? Widening our lens on interprofessional collaboration and education in sport and exercise medicine. *BMJ Open Sport & Exercise Medicine*, 8: e001377.
- Van Diggele, C., Roberts, C., Burgess, A., and Mellis, C. (2020) Interprofessional education: Tips for design and implementation. *BMC Medical Education*, 20: 455.

(受付: 2025. 10. 7, 受理: 2026. 4. 27)

Original Research



Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education Advance Publication
©2026 Japanese Association of University Physical Education and Sport

Implementation of an Interprofessional Education in Sports (IPE-S) program in the university setting:

Evaluation of the educational impact on understanding of sports-related professions and career development among sports and healthcare science students

Hirobumi TADA^{1,2}, Tetsuro YOSHIDA², Tsukasa KARASUYAMA²,
Asuka TERAMOTO¹, Kiho KONDO¹, and Kenji KUBO³

¹Faculty of Wellness, Shigakkan University,

²Doping Zero Association, General Incorporated Association,

³College of Sports Sciences, Nihon University

Abstract

Despite the growing diversification of sports-related professions, opportunities for students aspiring to careers in sports to understand the roles of professionals in sports and the importance of interprofessional collaboration remain limited. This study aimed to implement and evaluate the educational effectiveness of an interprofessional education in sports (IPE-S) program in the university setting. The program consisted of lectures and group work conducted by professionals from diverse sports-related fields and was implemented for undergraduate and graduate students in sports and healthcare sciences. It was designed to deepen students' understanding of diverse sports-related professions, encourage consideration of relationships among professionals, and promote reflection on their roles and responsibilities in relation to future career development. A total of 59 participants and 61 non-participants completed surveys and provided free-text responses before and after the program. Changes in awareness were assessed using a six-point Likert scale, and qualitative data were analyzed using text mining. The results indicated that participants developed a deeper understanding of professions supporting sports and demonstrated changes in attitudes toward interprofessional collaboration. Furthermore, post-program free-text responses revealed an increased frequency of the term "self," suggesting greater reflection on their roles and career development. Taken together, these findings suggest that, even as a short-term educational intervention, the IPE-S program may have contributed to improved understanding of interprofessional collaboration and reflection on career development. However, several challenges were identified, including limited opportunities for practical interprofessional experiences and insufficient time for group work. Future research should focus on developing more practice-based and longitudinal educational programs and evaluating their long-term impact on students' career development.

Keywords

Interprofessional Education (IPE), sports-related professions, career education

Corresponding author: Hirobumi TADA Email: tada@sgk.ac.jp